

中南米日系社会との連携に関する有識者懇談会
第一回会合（3月6日）のポイント

- 中南米の日系社会の世代交代の中で、文化的な問題を含めどういう形で連携を取っていくか。日系意識を作り上げていく上で、都道府県の役割は非常に大きい。海外日系人協会などの更なる貢献が期待される。
- 日系人の人材育成にどのように協力していくか。県費留学や県費による技術研修が今伸びている感じはない。海外日系人大会も留学生が積極的に参加しているが、それが恒常的な日系人意識、日系人の人材の育成に結びついていくか。海外日系人協会を含めての問題と思う。
- 北関東や関西に日系労働者の集住する地域がある。本来、日系社会と日本社会がつながることが望ましいが、そういう形になっていない。この機会に、この日系社会と日本人社会の関わりも整理したい。
- ブラジルを訪れた際、改めて移住された方々の苦勞、日本人としての意識と清々しさを感じた。今の日本人が学ばなければならない社会があるのだということを考えながら、日系社会という存在を、今回の有識者懇談会で見ていきたい。外務省、各種団体、地方公共団体が、今までの枠を超え、経済界を含めて、横串を刺すような提言に結びつけたい。
- 日本人とかブラジル人とかいう区別はなく、ブラジルから日本に来ている方への支援をしている。ブラジルの小学校に奨学金を出す、ブラジル人が集住地で活動するNPOを支援する、日本から帰国したブラジル人の子弟が現地で適応するための支援をブラジルサイドで行うなど、企業活動の中で取り組んでいる。
- 数が大変多いので、どういう形で日系人全体に対応するかが中南米では課題。大使館・領事館が窓口になって、草の根的に日系人の意向をくみ取っていただければ、支援を検討していきたい。まんべんなく日系人の皆さんに貢献できるのか、難しい課題。
- 日系と非日系の間に余り差を作らないことに賛同。日本に好感を持っている非日系人が差別されたという意識を持つのではないかと気になる。「日本語を勉強している人達」などいろいろなコンセプトがあり得る。非日系人につ

いて付け足しとしてとらえるのではなく、日系人社会を中心とする親日的な社会全体をターゲットとすべきである。

- 人材の戦略的育成が重要。架け橋になるような人材の育成の一つの鍵は、日本語－ポルトガル語、日本語－スペイン語だけではなくて、英語を介するところにもどんどん受け入れること。
- 研修に行き日本を経験することはとても大きな効果がある。一つ一つのプログラムについて、魅力的であるかないか、日系・非日系の間に壁を立てていないかを点検する。世界全体に日本の魅力をインプットする、日本ファンを作るという観点から考えて、その中の特に大事な地域の一つとして中南米を考える。
- 中南米日系社会の調査を継続すると、日本政府や日本の人達が日系社会を忘れていないというメッセージが伝わり、双方の良い関係が構築できる。
- 日系人・非日系人の区別はしないという話はその通り。他方、パンアメリカン日系大会でも、2世3世は非日系の友人を連れて来るので、彼らが日本文化への窓口になっている。世界的な共同研究においても日系人が活躍しており、学術交流の面でも組みやすい。
- 日系人を通じて様々なコミュニティーがどう繋がっているか、これからどう繋がっていくかということ。日系人自身も多様であり、これから色々な性質を持って活躍することを期待。また、ラテンアメリカから日本に来ている日系人の2世3世が、日本社会でどのように社会進出するかも課題として考えたい。
- これだけ日本のことを理解し、好感をもっていてくれる国々があるのだから、これを強化しない手はない。開発協力大綱にも日本の国益ということが書かれている。更地を耕すよりもほとんど耕されて作物が育っているところに援助を絶やすことは考えられない。JICAの元来の使命は、移住者支援であったのだけれども、移住を超えて現地に定着している日系人、さらにその周辺に広がっている親日派・知日派の方々との関係をさらに強化していくことは、日本の大きな国益だと考えている。しかも中南米にはG20の国が3つもあり、安保理外交上も重要な地域であり、その観点からも発言していきたい。(了)